ヤマメの憂鬱

スルメ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ヤマメの憂鬱

【Ｎコード】
Ｎ４４４６Ｕ

【作者名】
スルメ

【あらすじ】
■前書き
この小説は二次創作小説、「絶対正義は鴉のマークと共に」（嘘吐きｇｏｇｏさん著）を元に作られた、三次創作です。一次ではなく、二次でもないです。そういうのが苦手な方は、ブラウザのバックでお戻りください。
ＯＮＥＰＩＥＣＥが物語の舞台です。でも、ＯＮＥＰＩＥＣＥのキャラクターは一切出てきません。
東方キャラが少し出ます。でも、オリ主が格好だけ真似ているだけ

です。

そんな小説で大丈夫か……？

大丈夫だ、問題ない。

ピチューン……

「一人酒もいいけれど、たまには誰かと一緒に飲みたいね……」

一人で酒を飲みながら、そう呟く。
まだ未成年の私が酒を飲む事は許されないのだが、注意する人が居ないので構わずに飲み続けている。
……もっとも、この世界の人々にとっては別段許された行為とは言い切れないので微妙な所なのだが……
とはいえ、これだけ寂れた雰囲気の居酒屋だ。せめて無愛想なマスターが一人は居ても良いとは思うのだが、無いものねだりをしても仕方が無いだろう。

「邪魔するぜぃ」
「ひゃははっ、こりゃあ驚いた。こんな所で酒を飲んでる奴がいますぜ、親分」

そんな言葉と共に、絵に描いたような悪人の面をした男達が数人、店に入って来る。
見た感じではゴロツキにしか見えない彼らの中に、一人だけ雰囲気が違う男が居る事がわかる。どうやら、そいつが彼らの纏め役（もしくは、頭？）の様だ。

「ほぉ、逃げもせずに酒を飲むとは……面白い奴も居たものだ」

頭らしき男が、こちらを見て不適に笑う。……どうやら、彼らがこの店に客が少ない原因らしい。
どうも私は厄介ごとに巻き込まれたようで、これから起きる出来事が容易に想像できてしまった自分にため息が出そうだ。

「あんた達……酒場は酒を飲む所よ。それ以外の目的できたのなら、お引取り願うわよ？」
「何をっ、俺達に楯突こうっていうのか！？」
「まぁ落ち着け、お前ら……別に、俺達は暴れる為に来たわけじゃあ無い。ただ酒を飲みに着ただけだ」

私の言葉に反応した取り巻きが叫ぶが、頭はそれを制止してこちらに近づいてくる。
どうやら私をすぐにどうこうする気は無いらしく、頭からは殺意の類は感じられない。

「ただ酒を飲みに……ねぇ。それだけの理由で普通は街を襲ったりはしないでしょ、ベアー海族団船長、『クリムゾン・ベアー』のリーゼスさん？」
「中々の洞察力……といった所か？どうやら、ただの小娘ではないようだな」
「その両手を見て、何も思わないのは唯の馬鹿じゃないかい？もしくは、酔っ払いか」
「俺と対峙して、冷静に居られた奴だけが言えるセリフだな。もっとも、そんな奴は今まで会ったことが無いが」

そういって、笑みを浮かべながら『クリムゾン・ベアー』リーゼスは私の座っているカウンター席のすぐ横の椅子に座る。
酒瓶を取るその手、性格には五本の指が赤黒い液体で汚れていて――彼が動物系（ゾオン）の能力者、クマクマの実の能力者だという事を示している。
彼は酒瓶の詮を抜こうとはせず、片手を振り上げるとそのまま振り下ろし――酒瓶の口付近を切り取って空けるとジョッキに注ぎ始めた。

悪魔の実の能力、クマクマの実によって凶器と化したその手は、爪の一本一本が並の名刀よりも上の切れ味を持つナイフへと変貌する。その手を使い、襲った村々を一人残らず切り裂いた事で付いた名前が『クリムゾン・ベアー』。確か、賞金アベレージは一億四千三百万だった筈。

「はしたないねぇ……血が付いたままの爪で空けて、よく飲む気になれるものね」
「マナーがなっていないのは生まれつきでね。そっちこそ、そんなのを飲むガキがいるとは知らなかったぞ」

私の飲んでいる赤い液体を見て、彼は眉をしかめる。
まぁ、子供が酒を飲むのがあまり珍しくは無いこの世界でも、カクテルを――それも、ウォトカをベースに作られたカクテルを飲む子供は居ないだろう。
もっとも、私にとってはもっと強い酒でも問題ないが。

「で、何の用？用が無いのなら去ってくれない？あなたが居るだけで、酒が不味くなって仕方が無いの」
「用は済んださ……この村に最後の生き残りと、最後に軽く話をして見るのも悪くは無いと思ってな」

そういって、彼は先ほどと変わらぬ静かな口調で爪を見せる。
どうも、彼はこの村に居た人達を一人も生かしておく気は無いらしい。

「そう――で、見逃す気は？」
「あるとでも？」

追い詰められた獲物を狩るがごとく、彼は心底嬉しそうな笑みを浮

かべる。
どうもまともなのは見かけだけで、中身は相当な殺人――それも、人を切り刻む事に快楽を覚える性質らしい。

「そう――残念だね」
「あぁ、残念だよ……来世では、俺の様な人に会わない様に願うんだな！」

そう叫びながら、彼――リーゼスは、私目掛けその鋭い爪で斬りかかる。
ぱっと、赤い血が居酒屋に撒き散らされていく。私は、そんな光景を他人事の様に眺めながら――
『クリムゾン・ベアー』リーゼスだった何かが当たりに撒き散らされるのを尻目に、コップに残っていたカクテルを飲み干す。

「で、あんた達はどう始末されたい？別に、無理に答える必要は無いけどね」
「そんな、船長が……」
「ひっ……ば、化け物だ……」
「な、何をしやがったんだ……」

取り巻き達の言葉に、軽く凹みそうになる。畏怖の目でみられるのはもう慣れてしまったけど、それでも辛いものは辛いのだ。
そんな事を考えながら、リーゼスを引き裂き尽くした獲物を手から捨てつつ取り巻き達を一瞥する。全員が、恐怖で顔を引きつらせていた。
きっと彼らは、私が何をしたのかわからなかったのだろう。

「何を、ねぇ……自分で体験すれば、もしかしたら判るかもよ？」

私の言葉に、取り巻き達は一目散に出口へと駆け寄るが、勿論逃がすつもりは無い。
軽く、居酒屋を狂気で染めるだけで、彼らは動かなくなった。いや、動けなくなったの間違いか。
何が起きたのかを理解することが出来ずに、恐怖に彩られた目でこちらを見ていた。
彼らは今まで、常に命を奪う側だったのだろう。それまで、きっと良い思いをしたに違いない。
だとしたら――ここで、彼らが奪われる側に回ったとしても――ナニモ、オカシクハナイノダ。
……一瞬、思考を持っていかれそうになるが、必死になって食い止める。あの程度に、全力でいく気はないし、必要も無い。
私が気を逸らした隙に、自由を取り戻した彼らは必死になって逃げ出す。が、その程度では無意味だろう。
どうせ、つかまった所で処刑されるのが決まっている彼らに、情けは無用。なら、一思いにやってしまえばいい。

「まぁ、どうせ死体でも海軍は引き取ってくれるんだし……生け捕りじゃなくても、大丈夫だよね？まぁ、答えは聞いてないけど」

一億越えともなれば、極稀にというか、大抵部下にも賞金が掛けられている。船長と比べると賞金の額は低いが、賞金首である事には変わり無い。
逃げようとするが、既に彼らは私の巣の中にいる。逃げれる訳が無いし、逃がす筈も無い。

「あぁ……一つ言い忘れていたね。来世では、私の様な化け物に会わない様に願う事ね。もっとも、来世があればだけど」

―――――――――――――――

気が付いたら、私は見知らぬ姿で見知らぬ場所に居た。
最初は夢かと思ったが、どうもそうではないらしい。
そして、年が経つにつれてこの世界がどうも、「ＯＮＥＰＩＥＣＥ」の世界に似ていることに気が付く。
というか、東西南北に分かれる海とか、海軍本部とか、グランドラインとか、どうみても人間離れした達人達が大勢居る時点でほぼその世界で間違いないだろう。
いわゆる、最近小説で流行の転生と言う奴だろうか？しかし、そうなる切欠等はまったく思い出せないのだが……
とはいえ、切欠が判ったところで何が変わるわけでもないので、考えるだけ無駄だろう。

それにしても、成長するに従い誰かに似ているような気がするのは気のせいだろうか……？
しかし、ＯＮＥＰＩＥＣＥの主要キャラに少しくすんだ金色の髪の色をした童顔の女性キャラなんて見たことが無いし、そもそも私の名前と同名のキャラが居るとは思えない。
という事はだ、どうやら私はいる筈のないキャラ（オリジナル）か、ストーリーに関与することの無いモブキャラなのだろう。
今のところ困ることはないし、問題はないだろう。性別にいたっても、外見こそ違えどこの世界にくる前から身も心も純度１００％女性だから問題ないし。
冒険に出たかったら、冒険家になるか海軍に入ればいいだろう。それが嫌なら、このままひっそりと暮らすのも良い。
そう、思っていた。

赤く燃える家々、逃げ惑う人々。それを追う海賊達。……何処で何を間違えたのだろうか。

海軍の支部はあっさりと壊滅し、彼らを追い払う者は居ない。
そもそも、四つの海でも最弱のイーストブルーに、４０００万ベリーの賞金首が来る事自体が間違っている。アーロンの２倍って、何かの間違いとしか思えない。
話を聞いている限り、どうやら昔に一度この支部にいた士官に襲われた事があって、その事をずっと恨んでいたとか。恨みって怖いよね……
少女が大人の脚力に勝てるはずが無く、あっ気なく捕ってしまう。殺されずに済んだのは、奴隷として売り飛ばす為らしい。

戦利品の山を築いて、宴会を始める海賊達。
そんな中、戦利品の山の中に奇妙な実が転がっている事に気づく。普通の果実とは考えられないほど禍々しい外見の果実――そう、悪魔の実に。
両腕がふさがっていたけれど、縛り方が下手なのか立てない訳ではない。海賊たちは酔っ払っているし、これは――チャンスだ。
そう思った私は、周りから見れば滑稽にも、それでも私の中では必死に――そう、必死になって悪魔の実に向かって転がり、喰らい付く事に成功する。

しかし、私は愚かにも――そこから先のことを、何も考えていなかった。
悪魔の実が村人に食われた事を知った海賊は激怒し、憂さ晴らしとして村人に襲い掛かっていく。
見せしめとして一人、また一人となぶる様に村人達が殺されて行くのを見て――私は、辛うじて残っていた理性が焼き切れるのを感じて――

次に目にしたのは、惨劇だった。
全身を引き裂かれ、バラバラになったもの。部分的に何処か足りな

かったり、何の冗談か、高い所から落ちた時の様に、地面に叩き付けられて潰れたもの。
あまりにも悲惨なそれをみて、吐き気と共に口元に手を当てた途端に、ねちゃりとした、何かが自分の口の周りにべっとりと付いている事に気が付いて――
自分が何をしたのか、思い出してしまった。

あの時、私が口にした悪魔の実は『クモクモの実（モデル、ポイズンスパイダー）』。
蜘蛛を動物系か聞かれると微妙だけれど、昆虫系のものがあってもおかしくは無いのだろう。
しかし、問題はそこではない。蜘蛛が肉食か草食かと聞かれると、どちらかと言うと肉食系であって――
肉食系には、共通のある特徴があり、悪魔の実と呼ばれるそのシリーズの中でも一際悪魔らしく、凶暴性が増すのであり――
凶暴性が増した私は、そのときの精神状態もあってか、完全に悪魔の実の暴走状態に陥り――■ってしまった。
見境無く、ただ飢えを満たす猛獣の様に、無我夢中でがむしゃらになって、本能のままに――■■を。

胃の中が空っぽになるまで吐いても、何も変わる事は無く……擦り切れ掛けた心で、ふとある事を私は思い出す。
悪魔の実は、どうも厳密に言えば一種類でも、複数の能力と解釈できるものがある。
マゼラン署長が食べた悪魔の実であるドクドクの実は、一見毒だけしか出せないように見えるけれど、記憶が確かならば病気を引き起こす毒をも作り出すことが出来た筈だ。
もし、そのことが正しければ、私は毒を操る蜘蛛であり――病を操ることの出来る、蜘蛛でもある、と。
そこに該当するキャラクターを、私は幸か不幸か、一人だけ知って

いた。
東方Ｐｒｏｊｅｃｔに出てくる土蜘蛛の妖怪。病気を操る程度の能力を持つ、『黒谷　ヤマメ』を。

それから私は口調と格好を彼女と同じものにして、今まで使っていた名前を捨てて、それからは『黒谷　ヤマメ』と名乗って生きることにした。
妖怪は■を喰らう事があるのだから、私もそんな事をする事があっても不思議ではない、と。そう思い込むことにして。
それが唯の現実逃避だとわかっていても、私にはどうすることも出来ずにいて――

――――――――――――

「私、これからどうしたら良いんだろ……？」

誰も『居なくなった』居酒屋で、私は誰にとも無く呟く。念のため、賞金の掛かったものは保存もかねて繭の中に入れて転がしたが、それ以外は皆『居なくなった』。
何か頼もうとしたが、マスターが居ないので、自分で勝手に作った『前の世界で』お気に入りのカクテルを口に含む。けれど、『昔ほど』別段おいしくは無い。
ウォトカをベースにトマト・ジュースを加えたカクテル、ブラッディ・マリー。
血まみれのメアリー（Ｂｌｏｏｄｙ　Ｍａｒｙ）とも呼ばれ、ある国では二日酔いの迎え酒としても有名だけれど……
どうやら、私の『二日酔い』を抑えるには、役不足の様だ……
口元が汚れていることに気が付き、軽くふき取る。
そこには、ブラッディ・マリー特有の赤い液体が付いていた。

（後書き）

どうでしょうか……？
中々面白かった、ＯＮＥＰＩＥＣＥの転生モノ（？）、東方キャラ（ヤマメ）風込み込み小説が消えてしまって残念に思い、何とか読んだときの記憶を頼りに小説の復元をできたらな、と思って書いてみたのですが……
どうやら、何か色々としたモノが混入してしまい、別物へと化してしまいました……
どの程度、合っているでしょうか……？１割程合っていればいいな……と思うしだいです。
何分覚えていることが、以下の４つだけでして……

１、冒頭に主人公と海賊とのやり取りがある。
２、主人公は転生（憑依？）で、ＯＮＥＰＩＥＣＥの世界へ。
３、海賊に襲われたときに悪魔の実を食べ、暴走して村消滅。以後、自分を偽りヤマメとして生きる。
４、冒頭で出た海賊を始末、今後のわからない明日の事を考えて絶望する。

の、以上です。
なんというか、素晴らしいほどに抜け穴だらけですね……よく、一応のオチを見つけられたと我ながらに思います。
ちなみに、一番苦労したのはヤマメの口調ですね……あと、能力。昆虫系が本編で出ていない（？）ので、本作オリジナルとなっております。
ついで、ポイズンスパイダーと言うのも……ほぼ、苦しいネタだろうとは思いますが、許してください……他に良いアイディアが浮かばなかったので……そうなりました。

感想、指摘などあれば是非お願いします。不快だと思われたならば……その時は、すいません。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4446u/

ヤマメの憂鬱

2011年7月1日23時45分発行